

連歌の遊び

清水春美

「遊びをせんとや生まれけむ」は『梁塵秘抄』の有名な一節です。人は言葉を使って様々な遊びを生み出し、それを楽しんできました。連歌も和歌を基とした遊びと言えるでしょう。場を共有する人たちと関わりながら（五七五）の長句と（七七）の短句を繋いで展開していく連歌は、集団で創造していく一つの物語のようでもあり、一人で歌を詠むのとはまた違った楽しさを味わえるものです。

それだけでも連歌の楽しみはあるのですが、さらに趣向を凝らした遊びがあることを鶴崎裕雄先生より教えていただきましたので紹介します。それは賦物（ふしもの）連歌と言われるものの一つで、長句には古今和歌集にある歌の一部分を本歌として詠み込み、短句には「伊勢」「大和」といった国名を詠み込むものです。通常の連歌ではこのようなことはしませんのであくまでも遊びとしての連歌です。

平成二十九年十一月に行った古今伝授の里連歌教室での「賦古今国名世吉（ふすこきんこくめいよよし）連歌」の初折表八句をみていきましょう。

発句 白山に雪積もるらし今朝の声 泉

（古325みよしのの山の白雪積もるらし故里寒くなりまさるなり）

遠く白山に今朝は雪が降り積もっているのでしょうか、と思いを巡らします。どこからか声が聞こえていますが、何の声かはここでは明らかにされていません。

脇 いよよ高くも鳴く寒鳥 春美（伊予）

聞こえてくるのは甲高く鳴く寒鳥の声です。冬の光景がはっきりしてきました。

三 わが屋戸の庭に重ら集ひきて 千恵

（古133わが屋戸の池の藤波咲きにけり山郭いつか来鳴かむ）

私の家の庭に子供たちが集まってきました。鳥の鳴き声に混じり子供たちの声も聞こえます。景色の中に人の姿が加わりました。

四 若さあふれてまりを転がす 恵美（若狭）

子供たちは元気いっぱいまりを転がす遊びに興じています。

五 もみぢせば韓紅に染むるらん 美智子

（古264ちはやぶる神代もきかず竜田河韓紅に水くくるとは）

秋になればこの庭の木々も鮮やかに紅葉することでしょう。ここで人に当てられていたスポットが切り替わります。

六 夜長とともに村の静まり 裕雄（長門）

秋の夜長、村は静かです。次は月の句ですから夜の景になりました。

七 うたた寝をさめて清けし望の月 春美

(古553 うたた寝に恋しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき)

いつの間にかのうたた寝から覚めれば、空には満月がさやさやと輝いてい
ます。本歌からうたた寝の情趣が醸し出されます。

八 秋いづくより風の吹きくる 美智子 (伊豆)

どこからか秋の風が吹いてきます。

このようにして四十四句まで展開すると、古今和歌集の本歌二十二首と国名二十二
が詠み込まれることとなります。本歌取りの妙味も相まって歌に深みが増した展開と
なります。

また、詠み込む材料は他の歌集でも地名でもよく「遊び」は発展していきます。